

伝え合うことばの力の育成

—必要感のあるコミュニケーション活動をととして—

神 野 正 喜*

(2015年2月6日 受理)

A Study of Developing the Ability to Communicate

—Through the Communication Activity with the Necessary Feeling—

Masaki JINNO*

The aim of this paper is making a report of educational practice for upbring the ability to communicate. In 2011, children of the Class 2 of the sixth grade of Hiroshima City Kameyama Elementary School were corresponded with Yoshikazu Tanaka Ph.D. (Senior General Manager) who was developed blue roses for the first time in the world. The communication activity with the necessary feeling is effective for an instructional activity.

Keywords: ability to communicate 伝え合うことばの力, communication activity コミュニケーション活動

1. はじめに

「学校○○、校門を出ず」という言葉がある。○○には、教科名が入る。要は、学校で学んだことが学校の中で完結して、学校外の生活に生きていない（生かされていない）、学校で学んだことが、実生活で役立っていない状態を表す言葉である。

時には、「校門を出ず」どころか、学んだことが教科（授業時間）内で閉じてしまい、学校生活にすら生かされていないこともある。国語科で言えば、例えば、漢字の習得はできているのに、日記を書けば仮名文字ばかりという状態や、読むことの学習指導が読書好きを生んでいない状態を指していると解すればよいであろうか。

学びをととして、分からなかったことが分かるようになり、できなかったことができるようになる。学習事項を実の場で使うことによって、その定着度が高まり、達成感や充実感を得る。それが、新たな学びへの意欲となる。学校での学習指導は、やはり、そうありたいと願う。

次に取り上げるのは、そのような教育実践の一例である。

2. きっかけは、「ばらの谷」の学習

東京書籍の国語教科書六年上巻に、高山貴久子作「ばらの谷」という物語文がある。

中心人物のドラガンは、「人の力以上の技をもっている」「ばら作りの名人」である。ばらは、「名

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

人ドラガンの手が加わると、色もかおりも格別なものに」なる。だから、「若いむすめたちはこぞってドラガンのばらをほしがり、かみにかざったり、つばみをふところにしのばせてかおりを楽しんだり」する。

そのドラガンは、本来の色である淡いピンク色のばらに飽きて、白色、黄色のバラを作り、最後には、不可能と言われる青色のばらを咲かせる。しかし、物語の終末には、「次の年、ドラガンの畑には、あわいピンクのばらが一面にさきました。それはそれはみごとなさきようでした。」という叙述がある。ドラガンは、再び、淡いピンク色のばらを栽培するのである。

では、始めと同じ色のばらを育てている点は変わらないが、「ドラガンは変わっていないのだろうか」「ドラガンにとって、5年間（淡いピンク色の花を摘み取ってから、青いばらを咲かせるまでの5年間）は無駄であったのだろうか」については、主題を考えるうえで、話題にしたいところである。

実際の授業（平成23年6月、広島市立亀山小学校6年2組で実施した授業）で、この二つを問われた全員の児童が、「ドラガンは、変わった」「はじめと終わりのドラガンは、同じではない」と答えている。そして、その理由を、次のように読み取っている。

○いろいろな色のばらを作ることによって、ドラガンの気持ちが変わっている。

○はじめは、ピンク色のばらを見て、「うんざりだ」「なんてうす気味悪い、人にこびるような色だろう」と思っていたドラガンだが、最後には、同じピンク色のばらを見て、「これが、ばらの花なのか……。」とため息をついている。

○同じピンク色のばらを見ても、ばら本来のすばらしさ、きれいさ、美しさに気づいている。

○最後のドラガンは、ピンク色の中に、ばらの美しさを見出している。

3. 現代のドラガン！

淡いピンク色から始まり、白色、黄色、青色と、いろいろな色のばらを作り、最後には、また淡いピンク色のばらに戻ったとはいえ、ドラガンの挑戦の過程に惹かれる児童は多い。

ちょうど、「ばらの谷」の学習が終わりに近づいた頃（平成23年6月11日）、中国新聞に次の記事が載った。シリーズ「につぼん発明発見伝」の一つとして掲載された記事である。

「青いバラ」「パンジーの色素遺伝子活用」

英語の「ブルーローズ（青いバラ）」は「不可能」の意味があります。それを覆し見事に青いバラの花を咲かせたのは、サントリー植物科学研究所（大阪府島本町）所長田中良和さん（52）らの研究グループです。

花は、生まれながらに持っている遺伝子で、どんな色になるか決まっています。遺伝子が色素をつくり赤やピンクになりますが、バラにはもともと、青の色をつくる遺伝子がありません。

古くから多くの人が青いバラづくりに挑み、青っぽく見える品種はあったものの、色素が青かったわけではありません。

田中さんたちは、近年発達した遺伝子組み換え技術を活用し、1990年に研究を始めました。

ペチュニアの青い花びらから青色色素をつくる遺伝子を取り出し、青いカーネーションの開発に成功したものの、バラは青色色素をつくらず、青くはなりませんでした。

さまざまな青い花の遺伝子を試し、パンジーの遺伝子で青色色素ができることを突き止めました。「なぜ、パンジーの遺伝子で成功したのかは分かりません。生き物相手なので、カーネーションでできても、バラでうまくいくとは限らないところが難しい」と田中さん。

2004年に世界で初めて青色色素ほぼ100%のバラが誕生。09年から「夢かなう」の花言葉を持つ生花として売られています。

ただし、青いバラの花弁は紫がかかった上品な色合い。「花の色は、土の酸性、アルカリ性の度合いや生育環境などでも変わってきます。もっと青くしたいと思い研究中で、これからも今までにないものをつくる努力をしたい」と田中さんは、青い菊やユリづくりにも挑んでいます。

この記事を読んだO君が、自主勉強ノートに次のような感想文を書いてきた。

〈感想〉 ぼくが新聞のいい記事を探していると、国語でやった「ばらの谷」と関係深い記事を見つけて、びっくりしました。それは、ドラガンと同じで、美しいばらを作ろうとしている人で、その人が青いばらを作っていたことです。

その人はパンジー遺伝子を使って青いばらをさかせていたのすごいなあ、と思いました。田中さんにぼくが会うことができれば、「ばらの谷」という物語を知っているか聞いてみたいです。

当時、6年2組学級担任であった永松陽子教諭は、O君の感想文と新聞記事を一緒に、学級通信（「亀つ子6の2かわらばん」第24号に載せて紹介した。すると、児童全員が興味をもって読み、新聞記事を見つけたO君のお手柄を認め、田中良和さんに手紙を書くことになった。

4. 田中良和さんとの交流

田中さんに送ったのは、次のような手紙である。

【児童の手紙文①】

田中さんへ

はじめまして。私は、田中さんが作った青いばらを新聞記事でみて感動しました。一番びっくりしたのは、青いばらは、パンジーの遺伝子で出来たということです。写真を見て、すごいなあと思いました。それから、私は今、国語で「ばらの谷」という学習をしています。田中さんに似ていて青いばらを作る名人の話です。私は、田中さんの青いバラと物語の青いばらが、どこことなく似ている気がして興味を持ちました。これからもみんなが笑顔になるばら作りをがんばってくださいね。

（質問） どうして青いばらを作ろうと思ったんですか。

【児童の手紙文②】

田中さんへ

はじめまして。ぼくは、「ばらの谷」を読んで、青いバラが心に残りました。世界でも咲いていない青いバラの花を作ったのは日本が初めてだったので、すごいなあと思いました。ぼくは、まだ実物の青いバラを見たことがないので、見てみたいです。お体に気を付けてください。

クラス全員32名分の手紙に対して、思いがけず、田中良和さんから返信が届いた。中には国立科学博物館で開催された「花展」の図録も同封されていた。返信には、児童の質問にも一つ一つ答えてくださっていた。

毎日の多忙を極める研究生活にあって、返信をくださることは大変ありがたいことである。手紙文は双方向のやりとりがあつてこそ、書く意欲につながる。自分の書いた内容、書き方（表現）を受けとめて、それに反応してくれる相手がいれば、書くことのねうちを実感し、書く意欲の継続が図られる。ましてや、現代のドラガン（田中良和さん）からの返信である。児童の喜びは想像に難くない。そこで今度は、田中さんにお礼の手紙を書くことになった。

今回は、書く目的（お礼の気持ちを伝える）が、前回以上にはっきりしているので、児童の筆は進んだ。次に示すのは、その手紙文の一例である。

ありがとうございます

O子

今日、びっくりする事がありました。それは、青いばらを作られた田中さんから、手紙の返事が返ってきたことです。

わたしは、すごくうれしかったです。返事が来たらいいなと思っていたけど、本当に返事をもらったので、待ったかがありました。手紙で質問していた、質問の答えも返ってきました。すごくうれしいです。青いばらの種類は、色々あることが分かりました。二冊のパンフレットをもらい、とてもうれしいです。青いばらの情報が色々書いてありました。青いばらの実物を見ることはできないけど、パンフレットにのっていた青いばらも、とてもすてきでした。

田中さん、本当にありがとうございました。これからも、植物の開発、がんばってください。応えんでいます。

一人一人がこのような礼状を書き、それを冊子に綴じたものが、田中さんに送られた。これに対して、田中さんから学級宛に、自筆の暑中見舞いが届いた。また、サントリーグループのHPの社内向けページ「e-まど」（2011年7月28日）に掲載された文章「『青いバラ』の記事を読んだ小学生からのお手紙」が印刷されて送られてきた。

この田中さんの厚意に対して、児童全員が、次のような三行日記を書いている。

今日、3・4時間目に、田中さんの手紙を見ました。読んで思ったことは、田中さんは、仕事でおいそがしいのに、私たちのことを覚えてくださっていて、さらに手紙も書いてくださったので、とてもいい人だと思いました。今度は、私たちが修学旅行でおみやげを買って、写真をとって感謝の気持ちで手紙を届けたいと思います。

(S子)

平成23年9月15・16日の両日、山口・福岡方面に修学旅行に出かけた。児童の発案によって田中さんへのお土産を買い、「修学旅行に行ってきました！」と題する手紙文集、旅行中の写真とともに、田中さんに送っている。

それに対して、田中さんからお礼のメールが届いた日（平成23年10月4日）に、永松教諭は、朝

日新聞に掲載された「青いバラ アメリカンドリーム サントリー 北米発売へ」という記事を児童に紹介し、その感想を自主勉強ノートに書かせている。すると、児童は、「田中さんたちはがんばっているんだ!」と、自分たちが知っている方が携わっていることが新聞に載って、とてもうれしそうな様子であった。

さらには、ノートに、「また、何か青いバラのニュースがあるかもしれないから、新聞をもっと、ちゃんと読んでいきたいです。」「新聞を最近見てないから、こういうこと（朝日新聞の記事）があるから、今度は自分が発見できるように、新聞を見ます。」と書く児童も現れ、田中さんとの交流が、児童の自学の意欲になっている様子ははっきりと窺えるようになってきた。

5. 田中良和さんとの交流は続く

11月上旬になって、M君が図書室で借りて読んでいた『感動シリーズ7 知への欲求、未知への挑戦』（学習研究社、2009年2月）の中に、田中さんの青いバラ開発物語とも言うべき一編（取材・文／瀧下昌代「青いバラ研究開発チーム 幻の『青いバラ』を咲かせよ」）を見つけた。それを全員で読み、その感想を、近況報告（運動会のこと）とあわせて、手紙文に書くことになった。その頃、児童にとって、田中さんに手紙を書くことは当たり前になっていた。『知への欲求、未知への挑戦』を読んで、田中さんの偉大さをさらに知って、そのような方に手紙を書くことができるのを誇らしくも思っていたので、喜んで、手紙文を書く活動に取り組んでいる。

田中さんへ

N男

田中さん、お元気ですか。十一月になりました。だんだん寒くなってきました。ぼくたちは、十月に雨の中、運動会をしました。六年生は、組体操を最後までがんばりました。

みんなで、田中さんの本を読みました。ぼくは、本を読んで、こう思いました。田中さんは、オーストラリアで青いバラの研究をされていて、十年間も苦勞とプレッシャーにたえて、一つの青いバラが完成し、不可能と呼ばれていた、青いバラができたのがすごいと思いました。ぼくは、やっぱり、チームという大切な仲間がいるからこそ、この一つの青いバラがあるのだと思います。

田中さんは、今も研究をし続けているそうですね。お仕事、がんばってください。ぼくもがんばります。

これらの手紙に対しても、田中さんから学級宛に、メールで返信が送られてきている。さらに冬休み前には、クリスマスカードが届けられている。

それに応じて、児童が年賀状を送ったところ、田中さんは、児童32人の一人一人宛に、手書きの添え書きのある年賀状を返してくれている。また、田中さんは、サントリーのHP（2012年1月26日付。今回は、社外人も閲覧可能なページ）に、『『青いバラ』とお客様との絆～亀山小学校の生徒さんとの交流その後と、植物学会特別賞受賞の報告～』という一文を執筆し、その中に6年2組のことを取り上げてくれている。それは、次のような文章である。

嬉しいことに、広島市立亀山小学校6年2組の32名の生徒さん（二〇一一年七月二八日掲載のe-まど『『青いバラ』の記事を読んだ小学生からのお手紙』参照）との交流が続いています。

9月に「秋吉台、スペースワールドや博物館に行きました」という楽しい修学旅行の文集と「青いバラ」の新聞記事の感想文、修学旅行のお土産が届き、11月には、組体操をがんばった運動会の報告と、「青いバラ」開発ストーリーを読んだ感想を頂戴しました。さらに正月には「青いバラ」や竜のイラストが描かれた年賀状が届き、そこには「青いバラ」の開発への励ましや期待、「健康に気をつけてください」といった温かいメッセージが書かれていました。

これを読み、青いバラ開発チーム一同、新たな気持ちで「やってみなはれ」にふさわしい研究開発に取り組むことを誓いました。（後略）
（植物科学研）田中良和

これに対して、「明けましておめでとうございます 年賀状ありがとうございます」と題したお礼状集を送っている。その内容は、一人一人に年賀状を返して下さったお礼と、「M-1（漫オグランプリ）」という学年の催しについての報告である。

青いバラや田中良和さんへの興味や関心は尽きることなく、児童は、情報入手のアンテナを高くしていた。例えば、M君は、サントリーのホームページを開いて、田中さんの情報を得て、その内容と感想を1月31日の自主勉強ノートに書いている。M君は、自分の興味関心に基づき、ひとり学び（調べ学習）を行っている。ここに、国語科で習得した力を発揮している学習者の姿をみることができる。

その後、田中さん宛に、「M-1優勝しました!」という手紙文（報告文）集と、「M-1」の様子を撮影したビデオレターを送っている。「M-1」本選当日、6年2組は、インフルエンザで欠席者が続出するなか、見事に優勝。手紙文には、その喜びが記されている。

これらの便りに対して、田中さんからは必ずメールによる返信が届けられている。それだけではなく、1月下旬には、「卒業記念に」という言葉を添えて、青いバラの写真が入っているクリアファイル（田中さんが、青いバラの論文を発表した時に作成したクリアファイル）が、児童の人数分送られてきた。

6. これが、本物の青いばら！

クリアファイルをくださった田中さんに、今回もお礼の手紙を書き、手紙文集として綴じて送っている。どの手紙にも、青いバラの写真が入った上品な色合いのクリアファイルをいただいた喜びが表現されていた。

田中良和さんへ

先日は、サントリー限定のクリアファイルを送っていただき、ありがとうございます。

家に帰って、お母さんに「青いバラ完成記念のクリアファイルを田中さんにもらったよ。」と言うと、「すごいね、お母さんもほしい。」と言っていたので、改めて、すごい人だと実感しました。それに、「サントリーのホームページにも載る。」と言ったら、「え〜、お母さんも載りたい。」と言っていたので、ほくは、田中さんと交流ができて良かったと思いました。

もうすぐ、ぼくたちは、卒業して、交流ができなくなるけど、田中さんは、これからもがんばってください。応援しています。

M男より

児童にとってのサプライズは、クリアファイルに止まらなかった。3月に入って、卒業祝いのメッセージとともに、田中さんから10本の青いバラと60本の青いカーネーションが6年2組宛に届いたのである。卒業式当日に満開になるようにと、その日までの日数を計算して、卒業式の数日前に届けてくださった。本物の青いバラを見たいという願いは、誰もがもっていたが、これまでの学習をととして、青いバラが高価であることを知っていたので、それが10本も贈られたことに児童は驚き、感激した。青いカーネーションは、児童の人数分以上の数である。

卒業式当日、青いバラを花瓶に飾り、青いカーネーションを一人が一本ずつ手にした集合写真が撮影されている。その写真、お礼状、お礼のビデオレターを届けたのは言うまでもない。

7. 本実践の意義

以上は、国語科で「ばらの谷」を学習したことがきっかけとなり、一人の児童が中国新聞に載っていた「青いバラ」とそれを開発した田中良和さんに関する記事を見つけたことから始まった実践である。相手がいることなので、事前に計画を立てて行うことのできる内容ではないが、約10か月間、児童は、これまでの国語科の授業を通して学んだことを生かして、充実した学習活動を行っている。それらの意義を、次のようにまとめることができる。

○お礼や近況報告などの手紙文を書く活動を重ねたことによって、書く力が高まった。

児童は、2年生の時から、手紙文を書く経験をもっている。その相手は、身近な人であった。しかし、田中良和さんは、面識のない方である。今まで以上に、相手や目的に応じた文章を求められる。敬語を使う、時候の挨拶を入れる、相手の健康を気遣う文を入れる等の手紙文の形式を踏まえることも必要であった。練習のためではなく、必要感をもって手紙文を書くことは、文章表現力を高め、実生活に生きてはたらくことばの力を伸ばすことになった。

○特定の相手に対して、改まって話をする機会をもった。

田中さん宛のビデオレターを、二回作成している。対面ではなく、撮影するという設定ではあったが、緊張感をもって話す機会になった。声の大きさ、強弱、抑揚、間の取り方、一音一音の明瞭さ等、改まって話す経験をもつことができた。

○発展読書として、同じ文章を読んで、感想を交流した。

『感動シリーズ7 知への欲求、未知への挑戦』（学習研究社、2009年2月）に所収の「青いバラ 研究開発チーム 幻の『青いバラ』を咲かせよ」を読んで、感想を交流したことは、自分だけの読書では得られない〈読み〉に出会うことになった。

○必要な情報を求めて新聞やHPを読むという、自学自習の姿勢が見えるようになった。

無意識、無目的に文章を読むのではなく、自分が必要とする情報を探すことは、今後の学習において、より重要になる活動である。

○双方向の通信活動を体験した。

自分が発信者や受信者に固定するのではなく、相手とキャッチボールのようなコミュニケーションの関係を約10か月もの長期にわたってもつことができたのは、貴重な体験になった。自分たちが書いた手紙に、田中さんは、必ず返信をくださる。それに対する返信を書く必要性は、教師が説くまでもなく、児童が感じ取っていた。必然性のあるコミュニケーションの場が設けられていた。児童は相手（田中さん）に伝えたい、という思いと、伝えるべき内容をもって、活動に取り組んでいた。

この実践では、田中良和さんの存在が大きい。「ばらの谷」のドラガンと同じこと（青いバラを作ること）を成し遂げた人であることはもちろんであるが、児童が発信（書いたり、話したり）する相手が明確であり、しかもその相手が、受信者にとどまることなく、発信者としても児童に反応を返してくれたことが、児童の言語活動が継続した最大の理由である、と考える。

国語科で学んだことが、実生活で生きてはたらく機会を積み重ねることは大切にされなければならない。その経験は、学んでよかった（例えば、手紙文の書き方を学んでよかった）という思いにつながり、新たな学習への意欲にもなる。

学習したことの生活化は常に視野に入れておく必要がある。国語科で言えば、日常生活で機能することばの力の育成が目指されるべきである。

<注>

○本稿は、授業者である永松陽子教諭（広島市立亀山小学校）の実践に拠っている。

○児童の卒業後も、この実践への反響があった。中国新聞（2012年4月3日付）の「青いバラ 花言葉は『夢かなう』 亀山小児童が開発者と文通 挑戦続けることを学ぶ」という記事に取り上げられている。また、中日新聞（2012年4月15日付）の小中学生向け紙面「なるほどランド」には、「夢かなえる青色の花」という記事が掲載され、その中の一節（「3 『卒業、結婚節目に色付け』」）に、6年2組と田中良和さんの交流が紹介されている。さらには、2012年4月17日には、「サントリーブルーローズアプローズ」のブログに、約10か月にわたる広島市立亀山小学校6年2組との交流を紹介する文章が掲載されている。